

種苗管理センターニュース

Center for Seeds and Seedlings, NARO

第 98 号



北海道中央農場 ミニチューバー温室を上空から

- 巻頭言 試験・検査部長、生産連携部長 “就任のご挨拶”
- 農場便り 北海道中央農場
西日本農場
- 特集 【若手調査員に聞く】～ いま何してる？ ～
- トピックス UPOV 作業部会への参加
ISTA 認証種子検査ラボとしての活動

農研機構 種苗管理センター

「農研機構」は、国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構のコミュニケーションネームです。

試験・検査部長就任にあたって



令和 7 年 4 月から種苗管理センター試験・検査部長に就任いたしました。

農林水産省において、平成 30 年から令和 4 年にかけて輸出・国際局知的財産課種苗室長として種苗管理センターとは多くの仕事をともにしてきており、種苗法の改正などにも携わってきましたが、今度は種苗管理センターの側から関わるということで、身の引き締まる思いです。

令和 2 年の種苗法改正では、重要な知的財産権の一つである育成者権について、より適切な保護がなされるよう配慮されたものとなっていますが、センターに来て、育成者権者はもとより、捜査機関や司法機関からセンターへの品種類似性試験等の依頼が大幅に増えていることにまず驚かされました。これは種苗法改正もきっかけとなって、植物新品種、そして育成者権の重要性があらためて認識されたことにもよると考えていますが、侵害があった場合にはそれに適切に対抗できるということが、品種登録制度の根幹となりますので、大事な動きだと受け止めています。なお、新しく育種等されて品種登録された新品種以外には、育成者権が及ぶことはありません。

また、果樹等の日本で育成された優良な植物新品種の海外への流出が問題となっていますが、他の知的財産権と同様に育成者権についても、日本国内のみでなく、海外でも保護を進める必要性が高まっています。このため、品種登録の基盤となる特性調査について、センターにおいても国際的に調和のとれた試験が実施できるよう取り組んでいるところです。施設・人員・予算等の制約があるなかでは様々な困難もあったと思いますが、着実に準備が進められており、例えば果樹の栽培試験については、今年度中に開始できる見込みです。

センターにおいて日頃関わっている植物は、何らかのかたちで人の役に立つ植物という共通点があります。出願される新品種は、食用や観賞用として、人の生活を豊かにするために長い期間をかけて育種された成果に他なりませんし、種子・種苗等の検査業務は農業生産に直接関わるものです。センターでの業務に当たっては、目の前の植物を見るのみでなく、その先にある人の営みとの関わりまで感じていたいと考えているところです。

日々の業務を通じ、種苗法を支える技術的な基盤としての種苗管理センターの役割をしっかりと果たせるよう努めてまいります。

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構

種苗管理センター 試験・検査部長 藤田 裕一

生産連携部長就任にあたって



令和7年4月1日付けで、種苗管理センター生産連携部長を拝命いたしました戸川です。農林水産省出身で、これまで、農林水産省（地方農政局含む）以外に、環境省、消費者庁に出向した経験がありますが、農研機構への出向は今回が初めてとなります。どうぞよろしくお願いいたします。

かつて、つくば市に住んでいた経験があるのですが、その当時と比べて、街の変わりよう（特に、つくばエクスプレス沿線のマンション群）に驚かされました。現在、都内から通勤しておりますが、通勤電車内には、私と同様につくばに向かう方も多く、つくば市の発展を実感しております。ただ、通勤時間帯の車の渋滞について、バス通勤の身としては、何とかならないものかと思っているところです。（なお、バス車内も同業者と思われる方々で大変混み合っております。）

さて、改めて言うまでもありませんが、近年、農業を取り巻く環境は急速に変化しています。気候変動への対応、持続可能な農業の推進、スマート農業技術の活用など、多くの課題を抱えています。本稿作成時点で、着任から約3か月が経過しましたが、生産連携部の業務においても、これら課題の影響を感じております。

こうした課題に対応するため、生産連携部では、ばれいしょ・さとうきびの原原種の安定供給・品質確保に向けた効果的な緑肥・堆肥の選定や、栽培期間と収穫後の高温対策等、産地や研究機関とも連携し品質改善を図るとともに、必要な予算の確保に努めております。農場における土づくりといった基礎的なものから、AI 技術を活用したばれいしょ異常株の検出といった先端技術の活用まで、生産者をはじめとする関係者の支えになるよう、幅広い取組を進めているところです。

来年度からは、次期中長期計画がスタートし、種苗管理センター全体としても、環境の変化に対応しつつ、技術革新を取り入れながら、その役割を果たしていくことが重要となります。

慣れないことも多いかと思いますが、これまでの経験を活かし、皆様のお力添えいただきながら、一步ずつ着実に前進してまいりたいと考えておりますので、改めてよろしくお願いいたします。

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構
種苗管理センター 生産連携部長 戸川 雄介

農場便り【北海道中央農場】

北海道中央農場

北海道北広島市

総面積 198.3ha

主要業務

原原種（ばれいしょ）

特性調査、種苗検査



エスコンフィールド

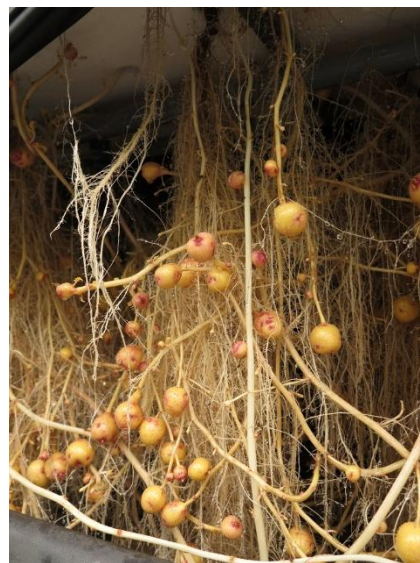
北海道へ旅行！といえば、「小樽」、「ニセコ」そして「ふらの」など人気観光地に並んで、今、北海道ボールパーク F ビレッジ・エスコンフィールド北海道が注目スポットになっています。言わずと知れたプロ野球・北海道日本ハムファイターズの本拠地球場ですが、公式戦がない日の入場者数が約 5 割を占めることからわかるように、魅力ある施設が並んでいます。このボールパークは北海道中央農場からはわずか 2.5km に位置しています。

球場が札幌ドーム（現大和ハウス プレミストドーム）から移転後、農場を取り巻く環境は大きく変化しました。農場前道路は北広島市の市道から道道へ昇格し、球場への接続道路になりました。それに伴い、交通量は平日・週末を問わず増加し、職員及び農場作業用車両が横断する際も一層の注意を要しています。このように農場周辺環境が変化しつつありますが、その役割に変化はありません。

北海道中央農場は、種苗管理センター内で唯一ばれいしょの新品種を試験研究機関等の育成元から受け入れる機能を持ち、孳恋農場と並びミニチューバー（MnT:10g 程度の種いも）の生産を担っています。新品種受入にあたっては、専用のラボでウイルスフリー化を行い無病性と品種特性に変化が無いことを確認し、MnT 生産のための培養苗増殖へ移行します。その後、MnT 専用の温室（植物工場）で、培養苗から MnT を大量生産します。MnT は全国各地の生産農場に送られ、2～3 年間ほ場で増殖後、原原種として配布されます。

このように北海道中央農場は、種ばれいしょを種いも農家に供給する起点農場としての役割があります。もちろん北海道中央農場でも、ほ場での増殖により主に新品種の配布用原原種を生産していますが、北海道中央農場で生産・配布した新品種の需要が高まり配布希望数が増えると、他の生産農場に生産を移管して、より多くの需要に対応する体制となります。

また、最上流種苗である MnT の生産農場として緊急増殖にも対応しています。不測時対応としてジャガイモシロシストセンチュウ（Gp）抵抗性品種「フリア」を、また、有望品種の早期普及対応として「ゆめいころ」の緊急増殖を担いました。今年度は、Gp 抵抗性品種「北海 114 号」の緊急増殖を進めているところです。



MnT 生産

北海道中央農場の原原種生産計画量は、種苗管理センター全体の4%程度（R7年）ですが、全66品種中26品種を担当する少量多品種の生産農場です。加えて、試験研究機関等へ配布される品種登録前の「調査用種苗」を39品種も生産する試験研究用種いもの供給基地でもあります。原原種と調査用種苗をあわせて計65品種を生産しているため、異品種混入防止をはじめとする品質管理には細心の注意を払っています。最近では異常気象による高温・干ばつが収量や品質に大きな影響を与えることが珍しくなくなり、栽培・品質管理についても徹底を図っています。また、MnT施設栽培を抱えることから、契約職員をあわせた職員数は45名の大所帯であり、労働安全及び交通安全に特に注意を払っています。

更に、農研機構の研究部門や民間企業等との連携事業である「AIを活用した種ばれいしょ異常株検出支援システムの開発」では、AI心臓部の一部となる教師データ作製を担当しており、確実な研究開発に貢献しています。

北海道観光の道すがら、北海道中央農場へも是非一度お立ち寄りください。

（北海道中央農場）

農場便り【西日本農場】

西日本農場は、2003年4月に岡山県笠岡市に移転して22年が経過しました。笠岡市は岡山県の南西部にあり、広島県との県境に位置しています。最寄りの笠岡駅に降り立つと「ようこそ笠岡へカブトガニの街」の看板が目に入ります。笠岡駅からバスで15分ほどの場所には、世界で唯一とされるカブトガニをテーマとした博物館があり、その周囲は、国指定天然記念物カブトガニの繁殖地となっています。

笠岡市は、瀬戸内気候に区分されているため、年間の平均気温や日照時間は、都道府県別でみると中間的な値である一方、年間降水量は平年値で1,055mmと少ないのが特徴です。また、当農場は、笠岡市の中でも低平な干拓地の中にあり、土壌は海成の強粘質軽塩土のアルカリ性土壌となっているため、植物栽培においては、緑肥や土壌改良資材の投入など日頃の土壌管理が欠かせません。現在、総勢44名（うち契約・派遣職員9名）が協力し合い、農場用地の環境整備、栽培ほ場の土壌管理、施設や農機具の維持管理を行いながら、各業務を実施しています。

当場の主な業務は、種苗法に基づいて実施している「農作物の品種登録に係る栽培試験」、「登録品種の育成者権者の侵害対策支援」、「農作物の健全種苗の流通に係る種苗検査」、研究所と連携して実施している「植物遺伝資源の栽培保存」です。

これら業務の中で最も多くのウエイトを占める栽培試験業務では、年間200～300点の出願品種について栽培試験を実施し、特性が均一に発現しているか、類似する対照品種（既存の品種や登



録品種）と比較して特性が明確に区別できるかなどを調査しています。当場は、栽培試験実施場所の中で最も多くの栽培試験を実施し（全体の約 5 割）、特に出願品種数の多いキク、バラ、カーネーション、ペチュニアなどを中心に年間 30 程度の植物種類を担当しています。これら栽培試験の結果は、農林水産省に結果報告書として提出し、品種登録審査に用いられます。この審査をクリアした出願品種は、その育成者に育成者権が付与され、登録品種として流通する中でその権利が保護されることになります。

当場では、7 名の職員が他の業務と兼任して、育成者権者の権利の保護・活用を支援する業務も行っています。育成者権者の依頼に基づき、相談窓口での助言や、品種類似性試験（登録品種と侵害が疑われる品種の比較栽培試験）などを実施しています。



キクの栽培試験風景



稲試験区の田植え風景

種苗検査業務では、農林水産大臣の指令により指定された種苗に関して、店頭で販売されている種子の表示検査と集取を行っています。また、種苗管理センターが収集した稲の種子について、実際に水田ほ場で栽培して品種本来の特性と異なる点がないか（品種の純度が保たれているか）についても検査しています。

主な業務の 4 つ目として、新品種の育成に欠かせない植物遺伝資源の栽培保存も行っています。これは、農業生物資源ジーンバンクのサブバンクとしての役割を担っている業務です。キク、いぐさ、カキなど 7 種類 1,454 品種を実際に栽培して、特性を確認しながら維持管理しています。

当場の職員は、元来の瀬戸内気候に加えて近年の夏季の異常な高温や、干拓地特有の土壌条件での栽培技術が求められるため、苦労しながら、工夫を凝らして業務に取り組んでいます。また、新たな業務として病害抵抗性試験の実施や、将来の新技术導入に向けた 3D を活用した特性評価技術の開発などにも取り組んでいます。今後も環境変化に対応しながら、業務の効率化に繋がる新技术の活用可能性を模索していきたいと考えています。



カキの剪定作業風景（遺伝資源植物）

最後に、そんな当場での勤務に関心のある方、今後、一緒に仕事をするようになるかもしれない方、プライベートで足を運んでみたいという方へ、笠岡市民のソウルフードといえば笠岡ラーメンです。人気の行列店など 30 以上の店舗があり、ラーメンのまちとしても注目されています。また、自然を活かした観光スポットも多く、中でも周囲の島々を巡ることができるのも魅力の一つです。

（西日本農場）

特集【若手職員に聞く】～いま何してる？～

令和3年度、令和4年度に採用された若手職員に「いま何してる？」と聞きました。

…いま何してる？… 十勝：蛸原 和規 調査員

担当している業務

十勝農場の蛸原です。令和3年4月に採用となり、つくば本所の種苗検査課で3ヶ月間研修を受け、その後十勝農場に異動となりました。十勝農場には、ばれいしょ原原種の生産に携わる種苗生産チーム、ばれいしょ異常株の抜取りや病害検定を行う品質管理チーム、ばれいしょほ場以外の輪作ほ場を管理する生産管理チームの3チームがあり、私は種苗生産チームに所属しています。種苗生産チームでは種ばれいしょの切断・植付から収穫・出荷まで、ほぼ一年中ばれいしょ栽培に携わります。種苗生産チームに配属されて今年で5年目となり、トラクター操作に慣れたこともあって機械作業を任される機会が多くなりました。植付や掘取作業では、職員や雇用者を乗せて農業機械を操作することもあります。安全かつ確実に作業を行うために、他の職員と意思疎通を図りながら作業するように心掛けています。



植付作業

大変だったこと、やりがいを感じたこと

大変だった作業は、ばれいしょの風乾・収納作業です。掘り取ったばれいしょが1t程度入った大型コンテナをフォークリフトで運搬し、施設に収納します。ばれいしょに風を当て乾燥させなければならないのですが、大型コンテナ及び送風機をどのように配置し、どのように風を当てると効率良くかつ効果的に風乾できるのか、試行錯誤しながら作業しました。

風乾を終えたばれいしょは選別作業に移ります。この時、選別したいばれいしょの大型コンテナを取り出しにくい場所に収納すると選別作業自体が遅れてしまうため、予め選別順番について関係職員と打ち合わせを行い、スムーズに取り出せるよう配置に心掛けました。

当初はどのように風乾・収納するか悩むことが多かったですが、先輩職員のアドバイスを基に自分でも考えて先を見通して作業できるようになったことに、やりがいを感じました。



ポテトハーベスターと青空

これからの抱負

農業機械の整備を行える人材になりたいと考えています。トラクターや農業機械の基本的な操作は行えるようになりましたが、農業機械の整備に課題を感じています。先輩職員の指導を仰ぎ、そして自分自身でも取扱説明書に目を通して分からない箇所があれば調べる、このような作業を繰り返しながら整備技術の向上を図っていきたいです。

また、特性調査業務にも興味を持っています。担当植物は変わる可能性が高いですが、どの農場でも機械を取り扱うと思うので、まずは十勝農場でトラクター及び農業機械の技術習得に努めたいです。

日常の楽しみ、過ごし方

今回の異動で初めて北海道に来たので、観光気分です。着任して最初の頃は週末に十勝地方の名物「豚丼」をよく食べに出かけました。その他にも、北海道の他農場の同期職員と予定を合わせて観光地へ遊びに行くことが多く、休みの日の楽しみになっています。

また、大好きなバンドの旭川公演に参加しました。ライブで盛り上がりたり日頃音楽を聴いたりすることで、気分転換にもなっています。



十勝地方の名物「豚丼」

…いま何してる？… 沖縄：渡邊 恵理香 調査員



病株の掘取り作業

沖縄農場について

沖縄農場の渡邊です。私は令和 3 年 4 月に採用され、つくば本所の種苗戦略室で 1 年間勤務した後、令和 4 年 4 月から現在まで沖縄農場で働いています。沖縄農場には、健全無病なさとうきび原原種の生産・配布を担当する種苗生産チームと、パイナップルやカンキツなどの植物遺伝資源を栽培し保存する遺伝資源チームがあります。

沖縄農場のある沖縄県東村は沖縄本島の北部地域にあり、酸性土壌を生かしたパイナップル生産が盛んです。東村産のパイナップルを与えて育てた「パイとん」というブランド豚もあり、農場近くの食堂で食べられる「パイとん」を使ったカツ丼は絶品です。

担当業務について

私は種苗生産チームの検定業務を担当しています。検定担当の業務のひとつに、病気になっていたり異常な生長を

していたりするさとうきびを目視で探し出して除去する「肉眼検定」があります。肉眼検定をする中では、罹病初期の小さな異変を見分けることに難しさを感じています。例えば、白すじ病は初期症状としてペンシルラインという細い白い線が 1 本現れます。この 1 本の線を見逃して放っておくと、他のさとうきびにも感染が拡大してしまいます。他の病害も初期症状はわずかな異変しかないので、見逃さないように集中力をもって見ています。先輩職員が掘り取った異常株を見させてもらったり、資料を読んだりして、病気の特徴を少しずつ覚え、初めて罹病初期の白すじ病を見つけれられたときはとてもうれしかったです。

検定担当者が異常株を見逃すと、病気が蔓延して収量が減少したり、罹病したさとうきびを配布してしまったりする可能性があるため、非常に責任のある仕事です。検定技術が日々向上していると実感していますが、慢心せず、少しでも気になる症状に出会ったときは、先輩職員に写真を見せたり、一緒に実物を見たりして、病気の特長や対応策を考えるようにしています。

これからの抱負

沖縄農場の勤務が 4 年目になり、後輩職員に業務を教える機会が増えてきました。病害検定の知識・技術を研鑽しつつ、今まで培ってきた技術を後輩に伝えていきたいです。また、大型機械を使った栽培管理作業といった検定以外の業務経験も積んでいき、生産業務全体に貢献できる力をつけていきたいです。

休日の過ごし方

普段は家でゴロゴロすることが多いですが、職員たちと一緒に沖縄の観光地を巡ったり、ダイビングや釣りに挑戦したりもしています。また、沖縄らしいことをしたくて三線を買いました。最近はまだあまり弾けていませんが少しずつ練習しようと思っています。



三線の演奏風景

…いま何してる？… つくば：竹中 和海 チーム員

自己紹介

種苗戦略室人事管理・育成チームの竹中です。令和 4 年 4 月に入構し、今年で 4 年目になりました。種苗管理業務に従事する職員の採用や研修を主に担当しています。種苗管理センターでは珍しい事務系職員です。

人事管理・育成チームについて

種苗戦略室はつくば本所にあり、予算や業務計画・評価、広報、人材育成など種苗管理業務全体の運営を支える業務を行う、ヘッドクォーター的部署です。人事管理・育成チームでは、採用・イ

ンターンシップ、研修、人材育成、人事評価など、種苗管理センターで働く「人」に関して、多岐にわたる業務を行っています。

担当業務について

私は入構以来、主に新卒採用事務を担当しています。採用業務は広報活動（学生向け説明会など）、選考活動（試験準備や試験当日の運営など）、内々定から採用までのフォローアップなど、とても幅広です。広報活動を始めてから採用に至るまでには1年半～2年程かかるので、すぐに結果が出るものではなく、どの段階でも気が抜けません。特に、「窓口」として学生とやりとりすることが多いため、明るく丁寧な対応を意識し、連絡時はわかりやすい文章になるよう気を配っています。大変だと思うこともありますが、とてもやりがいのある面白い業務だと感じています。



説明会資料の打合せ

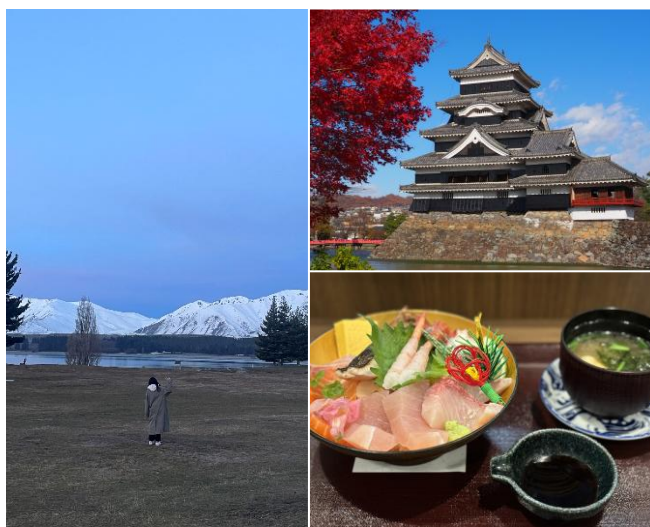
採用業務は人事管理・育成チーム内で完結するものではなく、農研機構本部や種苗管理センター内での調整や連携が欠かせません。実際に現場で働く職員の声を学生に届けるため、これまで多くの先輩職員に説明会や座談会などにご協力いただけてきました。協力をお願いするばかりで心苦しく感じることもありますが、種苗管理センターの未来と一緒に築く一員として、職員の皆さまと協力しながら活動していくことができ、嬉しく思います。

これからの抱負

入構当初は右も左もわからず、戸惑うことも多くありましたが、職員の皆さんに教えていただき、今では落ち着いて対応できるようになりました。まだまだ知識・経験不足で先輩方にサポートしていただくことも多いので、日々勉強していくとともに、業務では様々なアイデアを活かした挑戦ができたらと考えています。

業務以外の楽しみ

映画やアニメ、読書など基本はインドア派ですが、旅行も楽しみの一つです。最近は旅行雑誌を眺めながら、次の旅行先の情報収集をすることが楽しみです。一方で、同期や職員と一緒にスキーに行ったり、フルマラソンに挑戦したりと、アクティブに活動するときもあります。フルマラソンを完走した時の達成感はひとしおでしたが、筋肉痛はこれまでにないほどでした……。



夏休みに行った冬のニュージーランド（左）、
松本城（右上）、近江町市場（右下）

トピックス

◆UPOV 作業部会への参加

<UPOV について>

品種保護制度は、新品種の保護に関して、各国が共通の基本原則に従うことにより優れた品種の開発を促し、農業の発展に寄与することを目的とする国際条約に基づいており、日本もこの国際条約に批准しています。この条約は植物の新品種保護に関する国際同盟のフランス語略称（UPOV: Union internationale pour la protection des obtentions végétales）から UPOV（ユボフ）条約と呼ばれます。品種保護制度に関する技術的事項について検討を行うため、UPOV には 5 つの作業部会が置かれ、それぞれの作業部会で毎年会議が開催されています。

UPOV の各技術作業部会には、種苗管理センターからも 1～2 名の担当者が出席しており、特に日本にとって重要な植物種類について、テストガイドラインの検討に参加しています。

<第 57 回観賞植物及び材木作業部会（TWO）に参加して>

TWO の“O”は“Ornamental Plants and Forest Trees”の略称であり、キクやカーネーションのような草花からバラやイチョウのような観賞樹まで、幅広い植物種を対象としています。近年はオンライン会議での開催が続いていましたが、今年はオランダ王国で 2025 年 3 月 31 日～4 月 3 日の 4 日間で開催され、私は今回初めての現地参加となりました。

会議はオランダで栽培試験をおこなっている組織“Naktuinbouw”の会議室で行われ、各議題について現地に集まったメンバーとオンラインで参加したメンバーがハイブリッド形式で会議を行いました。多くのメンバーが現地に集まっており、議場外でも会話をする機会が多くあったので情報交換はもちろんのこと、他愛のない話をしてコミュニケーションをとることができ、オンライン会議では体験できなかった貴重な時間を経験することができました。

また、会議だけでなく、3 日目はオランダの種苗に関わる組織や Keukenhof 公園を訪問させていただきました。中でも Keukenhof 公園は美しく、32 ヘクタールの広大な敷地に 700 万球を超えるチューリップやヒヤシンス等の球根植物が咲き誇る風景は圧巻でした。公園だけでなく、ホテルから会議の会場までの道のりなども見渡すと球根植物が植えてある広大な干拓の畑が広がっており、これらの植物がオランダの産業において非常に重要なものであることを感じることができました。



Naktuinbouw



広大な球根植物の花畑

最後に、今回各国のメンバーと会話をしている中で、日本から発信する情報や技術に対して強い信頼を持っていると感じ、これまで TWO 等の作業部会で海外対応されてきた先輩たちが積み上げてきたものの大きさを実感することができました。私もまだまだ未熟ではありますが、しっかりと先輩たちの築き上げてきたものを継承し、取り組んでまいりたいと思います。

（雲仙農場 江口直輝）

＜第3回審査方法及び技術作業部会（TWM）に参加して＞

2025 年の TWM（審査方法及び技術）は 4 月 28 日～5 月 1 日にかけて中国の北京で開催されました。現地参加とオンラインのハイブリット開催でしたが、日本からは農林水産省と当センターから 1 名ずつ現地参加しました。

作業部会直前には、別途ワークショップが開催され、ワークショップ参加国の状況や新技術についての発表、意見交換がありました。日本からも農林水産省からの近況報告や当センターで取り組んでいる新技術の導入にかかる検討状況について発表を行いました。

本会議では、DNA 分子マーカをはじめとした技術の利用状況、新技術の取扱いに関する提案、各国間の技術協力について要請が行われるなど、非常に活発な議論がなされました。各国譲れる箇所、譲れない箇所があり、各国のスタンスがそれぞれ違うのでその意見調整をするためにお互いに言葉を尽くして議論がされており、緊張しつつも、大変有意義な時間を過ごすことができました。UPOV 国際会議は技術系の会議ですので、出席者には、特性調査の経験や、DNA 分子マーカをはじめとした技術に関する幅広い知識が求められましたが、それに加えて日本の利益を考えつつ発言する力（英語力、伝える力など）も求められたため、裏付けとなる知識を利用して自分の言葉で伝え、主張することの難しさや重要性を学びました。今後、さらなるスキルアップに繋げるためにも、まずは普段の仕事をしっかりとこなしながら、自己研鑽に励みたいと思います。



集合写真

（特性調査業務課 三橋 由香理）

◆ISTA 認証種子検査ラボとしての活動

<ISTA について>

ISTA (International Seed Testing Association、国際種子検査協会) とは、国際的に統一された種子の検査方法を定め、国際取引に広く普及させることを目的として 1924 年に設立された国際団体です。ISTA が策定した種子検査法は ISTA ルールとして発行され、国際標準法として広く利用されています。事務局はスイスにあり、2025 年 5 月現在 83 の国と地域の 253 の検査所が会員機関、うち 163 の検査所が ISTA 認証機関（国際種子検査証書を発行できる機関）となっています。種苗管理センターは昭和 28 年に世界で 28 番目の検査所として ISTA へ加盟し、昭和 29 年から国際種子検査証書を発行しています。現在、日本では種苗管理センターを含め 5 つの検査所が ISTA から認証を受けています。

<ISTA 総会について>

ISTA では、活動報告や ISTA ルール改正案等の討議のため、毎年異なる国で年次総会が開催されます。また、3 年に一度コンGRESSと呼ばれる大きな大会が開かれます。今年は第 34 回コンGRESS（5 月 5 日～9 日）がニュージーランドのクライストチャーチで開催され、当センターからは 2 名が参加しました。今大会では、5～6 日にシンポジウム、7～8 日に各技術委員会からの報告、9 日に ISTA 年次総会が行われました。

シンポジウムでは、画像解析と AI を組み合わせた種子や芽生の自動判定に関する研究、環境条件や病害虫が種子の品質に与える影響など、最新の研究成果が紹介されました。5 月 6 日の夜にはガラディナーが開催され、他国の総会参加者と交流を深めることができました。

年次総会では 100 名弱が参加し、指名代表 24 名が投票を行いました。ISTA ルール改正案の討議の際は、スクリーンに映した改正案について議論し、その場で案文の修正作業が行われることに驚くとともに、目の前でルールが変更される様子を見られて感慨深かったです。

また、理事長の交代や次期副理事長の選挙が行われ、理事会の顔ぶれが新たになりました。会議の休憩時間には、アジア代表理事 Ruel 氏（フィリピン）や、シンポジウムで種子生理について発表されていた篠原教授（東京農業大学）からワークショップ協力依頼の相談があり、他機関との連携がこういった場で生まれるのだと実感できました。

総会翌日の 5 月 10 日にはラボツアーが開催され、ニュージーランドの ISTA 認証機関である民間種苗会社 BARENBURG を視察しました。ここでは飼料作物の品種開発や検査を行っており、ライグラスの育種ステージについての説明が興味深かったです。

今回の大会参加を通して、国際的な会議の雰囲気を感じることができ、貴重な経験となりました。いつも参照している ISTA ルールについての議論の場を目にしたことで、ISTA ルールへ



ISTA 総会シンポジウム
（下は指名代表による投票）

の理解も深まったと感じました。今後も ISTA の活動を積極的に学び、日本の種子検査技術の発展に貢献したいと思います。

<ISTA の査察について>



ISTA 査察（病害検査の実演）

ISTA の認証検査機関は、認証を継続するため3年に一度 ISTA の査察官による現地査察を受ける必要があります。種苗管理センターでは9度目の再認証のため、今年7月3日に現地査察が実施されました。今回は、ケニアとフランスから2名の査察官が来所し、種子のサンプリング、発芽検査、病害検査等認証を受けている検査項目、また、検査業務に関わる品質保証マニュアルの妥当性について監査を受けました。査察官からは時に鋭い指摘や ISTA ルールの理解に関する詳細な質問があり、ひやひやする場面もありましたが、周到に準備をした甲斐あって、滞りなく査察を終えることができました。査察後の講評では、「部分的にいく

つか修正点はあるが、非常に良く準備されており、検査の実演がとても良かった。質問にも積極的に答えており、検査者の知識が深いことが分かった」とお褒めの言葉をいただきました。また、種苗管理センターオリジナルの種子計数装置について「とても素晴らしいので、ISTA の技術委員会で紹介してほしい」と高く評価していただきました。

現在、再認証を取得できるよう、ISTA からの指摘事項への対応を進めているところです。これからも日々改善を重ね、依頼者の皆様から信頼される検査所となるよう努めてまいります。

（種苗検査課 横山 舞由）

<編集後記>

今年の梅雨は、まるで梅雨のふりをした夏でした。例年ならしとしとと続く雨に少し憂鬱な気分になるところですが、今年は傘の出番も少なく、代わりに日傘と冷房がフル稼働。気象庁の発表によれば、観測史上でもまれに見る少雨と猛暑だったそうです。

農業に携わる私たちにとって、天候はまさに「空の上の上司」。異常気象が作物や種苗に与える影響を見極めながら、柔軟に対応していく力がますます求められていると感じます。

とはいえ、暑さに負けず、現場では工夫と努力と汗が光っています。今回のセンターニュースでも、そんな職員の取り組みをたくさん紹介しています。冷たい飲み物片手に、ゆっくりご覧いただければ幸いです。

（種苗戦略室）

（編集・発行） 農研機構 種苗管理センター 種苗戦略室

茨城県つくば市藤本2-2

TEL 029-838-6587 FAX 029-839-1183

ncss-info@naro.affrc.go.jp

<https://www.naro.affrc.go.jp/laboratory/ncss/>

<令和7年8月>